

清末の「巡礼ガイドブック」『参学知津』から見た 僧侶の巡礼

石野一晴

1. はじめに

本稿で検討する『参学知津』とは杭州の高僧が編纂した僧侶のための「巡礼ガイドブック」である。筆者は中国史上の巡礼を主要な研究テーマとしてきたが、本書の名前を初めて目にしたのは卒業論文執筆時に *Pilgrims and Sacred sites in China* を手にしたときであった¹。序文には 1989 年にカリフォルニアで開催された中国の聖地と巡礼をめぐるシンポジウムにおいてティモシー・ブルック (Timothy Brook) 氏が『参学知津』を用いて報告を行ったことが記されていた²。研究の道を歩み出した筆者にとって、このテーマは非常に魅力的であったが、遺憾にも当該論文はそのシンポジウムをもとに編まれた論文集 *Pilgrims and Sacred sites in China* には収録されず、今に至るまで公開されていない。

『参学知津』が母校京都大学の人文科学研究所に蔵されていることを知ったのは、大学院に入ってからのことである。『参学知津』には五臺山や普陀山といった、中国の主要な聖地の情報に満ちあふれ、さらには巡礼した僧侶が「印を請う」という記述が見られるなど、巡礼をめぐる情報の宝庫であった。そのときは、修士論文のテーマの候補として検討したほどである。

しかしながら、『参学知津』は全国の名山を網羅し、地方志で簡単には確認できない地名も現れる。これらの土地に関わる山志、寺廟志を全て調べあげた上で、さらに関連史料も網羅するとなると作業量は膨大である。史料のデータベースも少なかった当時において、それは途方もない作業であるかのように思えた。さらに、筆者が卒業論文で取り上げたのは唐宋における五臺山巡礼であり、『参学知津』が出版された 19 世紀のイメージは十分に思い描くことはできなかった。それゆえ、まずは日本人僧侶恵鏐が五臺山巡礼の帰路に観音菩薩像を置いて帰ったという縁起を持つ、普陀山の近世における巡礼を研究することからはじめたのであった³。

その後、長らく『参学知津』には手を付けることができずにいたが、筆者の脳裏に深く刻まれ続けていた。それゆえ、このたびパリで *Holy sites and pilgrimages* というテーマで国際学会が開催されると聞き、『参学知津』をふたたび紐解き、改めてこの書物に挑戦してみようと思い立ったのである。

本書をはじめて本格的に研究したブルック氏がいかなる議論をしたのかはわからないが、彼が編纂した *Geographical sources of Ming-Qing history* に

注 1… 1. Susan Naquin and Chün-fang Yü, *Pilgrims and sacred sites in China*, University of California Press, 1992.

注 2… Ibid., p.29.

注 3… 石野一晴「明代萬暦年間における普陀山の復興」『東洋史研究』第 64 巻 1 号, 2005 年, pp.1-36

は pilgrim route books という項目があり、『参学知津』と『五臺山道路全圖』⁴の二書を紹介する。『参学知津』は Knowing the fords on the way to knowledge と翻訳され、杭州開化寺の前住持である如海顕承の著で、杭州真寂寺の儀潤源洪によって編纂されたこと、1827年初版であるが1876年に再版されたもののみが現存すること、そして『参学知津』の最後には「地輿名目」なる項目が附せられていることなどが記される。さらに『参学知津』序文が Reginald Johnston の *Buddhist China* に英語訳されていること⁵など、書誌と関連情報はここに網羅されていると言って良い。

筆者が本稿に着手した時には、ほかに先行研究はないものと思っていたが、一足早くテンプル大学のマルクス・ビンゲンハイマー (Marcus Bingenheimer) 氏が『参学知津』の考察を進め、すでに成果を挙げ始めていた⁶。氏の論文を目にしたとき、屋下に屋を架すことになる可能性も考えはしたが、『参学知津』は筆者の研究の原点にも関わる。ここに敢えて筆者自身で関連史料を博搜して研究を進めていくことにした次第である。

ビンゲンハイマー氏の整理をもとに『参学知津』の概要と出版過程を確認しておこう。『参学知津』は巻首・上巻・下巻の三巻本である。全国の仏教名山を巡歴してまわった如海顕承が隠居してから、行脚の記憶にもとづいて参学の路程を書き記し、後の人々が同じような苦勞をせぬようにとこの書物を書き著した⁷。これを杭州の高僧である儀潤源洪がとりまとめて一冊の路程書に仕立て上げた。路程書は明末に盛んに刊行されはじめた一種の地理書である⁸。『参学知津』は一見すると明末の路程書と何ら変わるところがないように見えるが、実際の内容については後述する。

如海顕承の自序には「道光六年(1826年)解制後三日」、つまり旧暦の7月18日の日付が見られ、沈起潜の序文と儀潤源洪の題語から、それが道光7年(1827年)9月に刊行されたことがわかる。刊行にあたっては多数の僧俗から寄進が集まり、儀潤源洪はこれをもとに300冊を印刷し、西湖の畔にある瑪瑙寺の経房に版木を保管した⁹。現在我々が目にするのは、この初版本ではなく、すべて光緒二年(1876年)に重刊されたものである¹⁰。ビンゲンハイマー氏は太平天国時期に版木が失われたために、重版されたと推測する¹¹。おそらくその可能性は高い。ただ、筆者はさらに想像を膨らませることもできないかと考えている。『参学知津』が版木がすり減るほど人気の高い書物であった可能性もあるだろう。重刻された時期である光緒二年正月は、前年二月に即位した光緒帝にとって皇帝として迎える最初の正月であった。皇室から少なからぬ資金援助を受けていた杭州の仏寺が、『参学知津』の重刻をもって光緒帝のために一種のセレモニーを実施したと見ることもできるのではないか。

『参学知津』の巻首に載る僧侶たちへの戒めの言葉を述べた「朝山十要」は非常に興味深い。僧侶はできる限り複数で移動し危険を避けるべきこと、事前

注 4…Timothy Brook, *Geographical sources of Ming-Qing history* (2nd edition), University of Michigan 2002. p.27

注 5…Reginald Johnston, *Buddhist China*, (London: John Murray, 1913) なお、Johnston が依拠したのは福州にて出版された『朝四大名山路引』という冊子であるという。『参学知津』は名前を変えて様々なバージョンが流通していたのであろう。

注 6…Marcus Bingenheimer "Knowing the Paths of Pilgrimage: The Network of Pilgrimage Routes in Nineteenth-Century China" *Review of Religion and Chinese Society*, vol.3, 2016, pp.189-222.

注 7…『参学知津』題語

注 8…谷井俊仁はかつて「路程書の時代」において明代路程書の状況を整理し、路程書が難商とよばれる商業に新規参入した経験の浅い商人を读者として想定したものであったと説く。谷井俊仁 1996 「路程書の時代」小野和子編『明末清初の社会と文化』(京都大学人文科学研究所), pp.415-455。谷井の論文で主に検討されるのは明末の路程書であるが、最後に清代の路程書と交通状況にまで説き及ぶ、その明代との違いにつ

いて語られる。路程書の研究としては谷井の論文がもっとも優れているが、それ以前にも山根幸夫「明代の路程書について」(『明代史研究』22, pp.9-24, 1994年)、水野正明「『新安原板士商類要』について」(『東方学』60, pp.96-117, 1980年)、楊正泰「明代駅站考 附:一統路程図記、士商類要」(上海古籍出版社, 1994年)、Timothy Brook, "Guides for Vexed Travelers: Route Books in the Ming and Qing", *Ch'ing-shih wen-t'i*, Volume 4, Number 5, 1981, pp. 32-76. などがある。そのほか牧田諦亮編著『策彦入明記の研究(上)』(法蔵館、1956年)には策彦が入手した路程書である『図相南北両京路程』についての記載がある。

注9…『参学知津』巻首

注10…筆者の知る限りでは日本では三カ所に『参学知津』の所蔵がある。まずは京都大学人文科学研究所の松本文庫所蔵本である。筆者が学生の時に見たのはこの版本である。二つ目は関西大学内藤文庫本である。これは内藤湖南が蘇州で購入したもので「己亥十月念九在蘇州日所購」との題記が残される。これは1899年に内藤湖南がはじめて中国に行った際に購入したものであろう。三つ目は大阪大学懐徳堂文庫本である。本稿では主にこの版本にもとづいて考察している。懐徳堂本は、封面がや

にできるだけ巡礼のルートを定めておくべきこと、方言の差異に対応するため筆談を大いに活用すべきこと、など僧侶たちの参学の様相を想起する手がかりにあふれる^{*12}。

『参学知津』は合わせて56のルートを紹介する。本稿の最後にこれを一覧にして示した。本稿では原文を引用する際には1-1のように通し番号を付記している。ビンゲンハイマー氏は『参学知津』所収の全ての地名をGISによって整理したうえで2枚のテーマ図にまとめ、路程が中国全土を覆い尽くしていることを明らかにする^{*13}。そしてこの路程は大枠において明清の駅伝路線と一致することを示す。つまり、清末の僧侶の巡礼に用いられた交通路は明末の商人たちが旅したものと大差ないことになる。では、『参学知津』の独自性がどこにあるのかと言えば、目的地が名山や寺廟道観であり、最終的に大通りから離れるところにあった^{*14}。

このようにビンゲンハイマー氏の研究は広い視野から行われており、改めて筆者が付け加えることはないかのようにも思える。しかしながら、現時点で公刊されている論文を見る限りにおいては、ビンゲンハイマー氏の研究は巡礼路の全体像などマクロな側面に重点が置かれる。氏の著書 *Mount Putuo and Its Gazetteers* では『参学知津』を利用して清末の普陀山の具体的状況を論じてはいるものの、それ以外の地域には検討は及んでいない^{*15}。『参学知津』の最大の価値は、幹線を離れて深山に分け入るときの記述である。人気の少ない山道の中でどの分かれ道を通るのか、どの寺で宿泊でき、修行先として受け入れてくれるのか。こういった情報である。

本稿は、上記のようなビンゲンハイマー氏の研究の成果を取り入れつつ『参学知津』の細部にこだわって読み解くことで清末の僧侶達の参学の具体的状況を浮き彫りにしていくことを目指す。まずは、『参学知津』の書物としての特徴をまとめたのち、二つのキーワード「挂単」と「勤問」を通じて、この書物の読者がどのような旅をしていたのか解き明かしていきたい。

2.『参学知津』の特徴

本章では『参学知津』の具体的な内容について語る前に、本書の特徴を整理しておきたい。『参学知津』の基本的な内容は遊記と同様の路程情報である。しかし、「参学」つまり「参禅学道」を表題に掲げていることからわかるように、あくまでも僧侶が修行のために旅をすることを前提とした書物である。儀潤源洪の題語には以下のような記述がある。

客曰、茲為朝山向方而設、何語兼参学先導耶。予曰参学略有五種。一、已事未明、尋求知識。二、機緣不契、別訪高明。三、已明大事、隨訪應化。四、

特為進香、植福培因。五、誇張勝境、私圖名利。前三正當、第四猶可、至於散意雲水、名利自欺、其誤甚矣^{*16}。

ここでは五種類の参学が示される。そのうち「已事未明、尋求知識。」「機縁不契、別訪高明。」は容易に想像できよう。「已明大事、隨訪應化」も理解できる。しかしながら、中には「進香」つまりお参りのためだけに旅に出る僧侶もあり、それを儀潤源洪は「猶可」と評価する。最後の「誇張勝境、私圖名利」に至っては、もはや修行とはかけ離れた破戒僧のごとき醜態である。このような記載は、読者として想定される僧侶たちが真摯な修行者とは限らなかったことを示している。如海頭承と儀潤源洪はこういった多種多様な僧侶が参学の旅に出る状況を心にとどめていたように見える。巻首の「朝山十要」には以下のような言葉が見られる。

若三五成羣、縱兇任惡、不能留住之寺、強行挂搭、不能供養之庵、強索飲食、是流窮面目、非訪道心腸、切不可入此惡習、以招惡名^{*17}。

このような子供でも分かりそうな道理をことさらに説かねばならなかったのは、徳を積んだ高僧を第一の読者として想定していなかったからに外ならない。明らかに素養の無い僧侶まで往々にして参学の旅に出てしまったのが清末の仏教界の実情であった。まずはこのことを大前提として押さえておきたい。

『参学知津』の冒頭には「朝山十要」のほか二種類の經典が収録される。ひとつは『梵網經』卷三十七の「冒難遊行戒」、もうひとつは『華嚴經』卷七十七の「入法界品善財參德生童子有德童女章節錄」である。『梵網經』は読者に参学とはいかに苦しいものであるかを説き、輕率に参学の旅に出ることがないように戒める。

このような文章が冒頭に掲げられていることは、多くの僧侶が後先を考えずに参学の旅に出ていたことを伺わせる。途上で命を落とすようなことがあれば、あらゆる修行は烏有に帰す。『梵網經』を読んで、尻込みするのであれば、参学などに行く必要は無い。杭州にとどまりそのまま修行を続ければ良いのだ。

『華嚴經』の「入法界品」は参学の模範としての役割を果たしたことであろう。周知のごとく善財童子は多数の師を巡ったのち最終的に普賢菩薩のもとで悟りをひらく。参学の旅に出る僧侶たちも善財童子のごとく各地を巡礼し、良師に邂逅し、悟りに至ることを期待したのではなかろうか。

『参学知津』が世に現れるまでは参学のための地理情報を提供する書籍は存在しなかった。ではそれ以前には、参学に出る僧侶たちはどのようにして路程情報を入手していたのであろうか。序文には以下のような記述がある。

や痛んでおり、主に下巻の後半部分、とくに「地輿總目」の部分の糸とじに不適当な部分があり、版心部分の文字を見ることができない。これは松本文庫本によって補った。筆者は国外の版本を調査できていないが管見の限り、アメリカのハーバード燕京図書館と台湾中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館に蔵されるようだ。

注 11…Bingenheimer, *op.cit.* p.196

注 12…Bingenheimer, *op.cit.* pp.198-205.

注 13…Bingenheimer, *op.cit.* p.208, p.213.

注 14…Bingenheimer, *op.cit.* p.194

注 15… Marcus Bingenheimer, *Island of Guanyin : Mount Putuo and Its Gazetteers*, New York, Oxford University Press, 2016, pp181-187.

注 16…『参学知津』巻首、題語

注 17…『参学知津』巻首、朝山十要

注 18…『参学知津』巻首、
沈序

吾杭淨慈如海開十、朝山日久、足跡遍經、所過通都大邑、山陬海隅、昔得之於耳聞者、今徵之於目睹、昔考之於書內者、今信之於局中、乃歎非参学無以知津、欲知津必先参学也^{*18}。

如海が天下を経巡る前には、必要な情報を伝聞と書物から得ていた。その中には寺廟内の年長の僧侶や杭州で修行する僧侶からの情報が大きな役割を果たしたことであろう。出発後は道行く村々や、宿をとる寺廟で人々と情報交換をしていたはずである。『参学知津』には、民間で口頭により広まっていたと思われる情報が多く含まれる。たとえば巻首には「逐月暴風日期」と呼ばれる項目が含まれる。以下にその内容を示そう。

附録逐月暴風日期。水路固宜提防、陸路亦須謹慎。如在本日不起、前後三日之中、準有應驗、毋得忽略。

正月初九日玉皇暴 廿九日龍神會暴

二月初七日春期暴 十九日觀音暴

二十九日龍神朝上帝暴

三月初三日元帝暴 初七日閻王暴

十五日眞君暴 廿三日天妃暴

二十八日諸神朝上帝暴

四月初一日白龍暴 初八日太子暴

二十三日太保暴 廿五日龍王暴

五月初五日屈原暴 十三日武帝暴

二十一日龍母暴

六月十三日彭祖暴 廿四日雷公暴 最烈

七月初八日神熬暴

八月十四日伽藍暴 廿一日龍神大會

九月初九日重陽暴 廿七日冷風暴 極凶

十月初五朔日神暴 二十日東嶽朝天

十一月十四日 水仙暴 廿九日西嶽朝天

十二月初八日 臘八暴 廿四日掃塵暴

又月逢箕壁翼軫、四宿之日、主有風雨、行者擇之。如不得已、亦宜防之。

これを見てもわかるように、旅行に影響する悪天候が発生する時期を、各種の神佛の祭日の名前を用いて整理しているのである^{*19}。このような祭日は日用類書にも必ずと言って良いほど記載されているから、清末の僧侶たちの頭の中にも入っていたことであろう。このような名称であれば暴風が発生する時期は容易に記憶できたに違いない。

注 19…『参学知津』巻首、
逐月暴風日期

こういった「～暴」という名称は『参学知津』のオリジナルというわけではない。たとえば『中山伝信録』や『琉球国志略』など琉球への冊封使派遣に関わる書物には「閩王暴」の記載が見られる²⁰。このような情報は水上交通においてきわめて重要な役割を果たしていたに違いない。

路程情報は本来的に口頭で伝わるものであった。策彦が日本に将来した『図相南北両京路程』の冒頭には「沿途水駅歌」、『士商類要』にも「水駅捷要歌」といった歌が収録される。同様に日用類書でも歌曲の形で路程が紹介される²¹。節をつけることで暗唱は容易になり、旅する人々はこれらの情報をまずは音で記憶してから旅立ったことであろう。

ビンゲンハイマー氏は『参学知津』が同時代の書籍を何ら引用していないことを指摘している²²。確かに本文中には書名が出てくることは全くない。『参学知津』の情報源が主に如海顕承の記憶であることは、「九級庄（一里）某某寺（1-1）」²³といった記載からも明らかである。「某某寺」はもちろんこの寺の正式名称ではない。正式な名称を如海顕承が思い出せなかったのもこのような記載になっているのであろう。編纂時に地方志などの書籍を参照して記憶の空白を補うことはせず、自己の記憶に頼っていたために、最終的に『参学知津』の中に正式名称を書き及ばなかったのである。九級庄に近い寺廟はこのひとつだけで、他の寺と紛らわしいという問題もないから、「某某寺」という情報さえあれば充分だったのであろう。

『参学知津』における情報の多寡と、その聖地における典籍史料の豊富さには大きな関連はない。例えば清代の普陀山志の記載は極めて充実しているが、それが『参学知津』に反映されている様子はない。むしろ如海顕承がどれだけ逗留していたかと深い関わりがあるように思えてならない。とりわけ特徴的なのが五臺山に関わる記述である。

殊像寺（即俗稱）臺壇（此處以五臺環繞中忽空平故云。然朝臺之路卻有多岐、又在乎人各發心、各有因緣、不可執着、大概總要虛心勤問為第一、多備乾糧水菓為妙。時予因借殊像寺長單、故得次第登禮、所以冊中有屢回殊像寺字樣。是此補書。）（1-1）

五臺山の情報は他の聖地と比べてもとりわけ詳細である。如海顕承は臺懷鎮の殊像寺において長期間滞在したことで、この地の状況を知り得たと思われる。彼は荷物を殊像寺に預け、五臺山の名勝古蹟を経巡った。これは広西省の記載とは明確な対照をなしている。

廣西省城桂林府臨桂縣（臨亦作林）老君洞東門（外、過）浮橋某某寺（又）劉海洞（等廣西地方因未久停、不及其詳。大都叢林稀少、靜室平平、即至

注 20…『中山伝信録』巻一「風暴日期」、『琉球国志略』巻五「暴期」。

注 21…谷井前掲論文、p.420.

注 22…Bingenheimer, op.cit. p.196

注 23…『参学知津』巻上。なお本稿の末尾には『参学知津』の目録を示した。以下に『参学知津』の本文を引用する際には巻上を1、巻下を2とし、個別の路程を示すことにする。巻上の一番目の路程は1-1、巻下の3番目の路程は2-3のように示す。

廣東陸路、亦所知不據云、山路狹小、不便行走、總要如地問境、虛心接物、臨時見機、自然如法。今將下廣東水道開列於後。)(1-22)

この地域に関しては、必要十分な路程情報が書かれてはいるものの、ここでも「某某寺」という記述があるように正確さを欠く。「叢林稀少、靜室平平」という広西は、禪の修行に専念できるような名利も少なく、如海顯承が僧侶達と交わり情報を得る機会も限られていたことであろう。

『参学知津』の末尾に付されている「地輿総目」は、この書物が実際にどのように使われていたのかを推測する手がかりになる。「地輿総目」は如海顯承ではなく儀潤源洪が収録したものである。儀潤源洪は「地輿総目」を合刻した理由を4つ掲げている。

述曰、是書之録、有四縁也。一、行脚安單、易尋貫籍。二、新戒牒録、可無謬舛。三、披閱墳典、了知處所。四、每臨書札、不致譌錯²⁴。

注 24…『参学知津』附録、
地輿總目

「行脚安單、易尋貫籍」が意味するのは、雲遊僧がやってきた折に、その僧侶の出身地を容易に知ることができること、つまり遊行僧の受け入れの際に便利であるということである。維那の事務に欠かせない情報であったに違いない。そのほかの3つの理由も旅立つ僧侶のためというよりは寺院内部の事務手続きに関わる。儀潤源洪はさらに以下のような説明を加える。

證義曰、叢林眾僧稱十方者何、以其貫籍各異、隨縁依止也。貫籍各異、隨縁依止也。貫籍、有名同而處別者、如太平府有二處、一在徽州、一在廣西、又廣西有太平州、四川綏定有太平廳、又江南寧國與浙江台州俱有太平縣、是太平即有六處其保定、寧海、新安、臨安等、皆一名而數處既有名別而處同(即有)處別而名同、籍貫之誤、傳記之舛、由此來也。可不細心乎。於是録此地輿總目、詳註其名、使臨用者備考、亦決疑之一端云爾²⁵。

注 25…『参学知津』附録、
地輿總目

『参学知津』が「地輿総目」と合わせて出版されたことは本書の需要がどこにあったのかを示す。要するにこの書物は「寺院に備えるべき」一種の工具書なのである。もし僧侶が各々『参学知津』を手にして旅することを前提にすれば「地輿総目」は何の役にも立たないどころか、むしろ邪魔ですらある。日本所蔵の『参学知津』に欠本はないが、寺廟内で散逸しないよう珍重されていたものが日本に伝わったのではなかろうか。

3. 「挂單」と巡礼ネットワーク

『参学知津』は仏僧の参学に資するためという特殊な目的により書かれたものである。その意味で一般的な路程書とは様相を大いに異にする。このような本書の特徴は繰り返し現れる二つのキーワードに象徴される。本章ではまずその一つである「挂單」について議論をしていきたい。

「挂單」とは「掛塔（かた）」などとも呼ばれ、修行者個人の衣鉢袋を座禅道の定められた単位（席）の釘に掛けることが原義である。ここから叢林に留まり安居修行することを指すようになった。「掛錫」もまた錫杖を掛けることで、同じような意味を表す。寺院に在留するには一般には住職の許可とその申請書が必要となるが、その次第は清規に定められている。

『参学知津』には、「挂單」という表現が寺院の記述のあとに頻繁に現れる。例えば「大佛殿（於此挂單）（2-24）」とあれば大佛殿にて挂單できることを示し、「萬年寺（有三殿、俱挂單）（1-15）」とあれば萬年寺内の三つの仏殿全てが僧侶を受け入れることを示す。遊行僧の手元にはわずかな旅費しかなく、宿に泊まることなどとはできない²⁶。「挂單」できるか否かは旅程を決める上でも極めて重要であった。

注 26…『参学知津』巻首、
朝山十要

『参学知津』の路程が明代以来の駅伝と重複することは先述の通りである。しかし、『参学知津』では行政の中心や駅伝が重要な情報として記されているわけではない。路程書は官によって作られた路程情報が元になっていることもあり、县城や関所を軸にして記述が進められるが、『参学知津』は縣州府省といった行政中心が無視されることすらある。

例えば、「高平縣（著脈訣）王叔和醫士故里（不進縣城）北門（外）西茶庵（1-8）」のような記載が見られ、「大東村（由叉路進口、不用走房山縣）（1-1）」とあえて「房山県に行かずともよい」と述べることすらある。いずれも城内には挂單できる場所がなかったのであろう。おそらく、遊行僧たちにとって行政・経済の中心はさほど大きな意味を持たなかった。その地が経済的に栄えていればいるほど、貨幣経済に飲み込まれ、手許が不如意な僧侶たちにとって居づらい場所であったろう。あるいは托鉢をしやすいという利点はあったかもしれないが、少なくとも『参学知津』を見る限り、そのような記載は見られない。彼らはまず挂單できる場所を探したのであった。

仏教が盛んな地域であれば、挂單のできる寺廟は安心してその地に長く留まり修行ができる条件を備えていた。『参学知津』は以下のような場所があったことを伝えている。

鼎湖山慶雲寺、（看）飛水潭、虎山頭、開山（初二）祖塔院（虔誠瞻禮）韋駄、伽藍、諸天、諸菩薩（四聖感應、寺寺皆然、惟此鼎湖、格外不同。若苟且毫厘立見加報、兼田無一畝、地無半寸、過堂粥飯、兼備熟菜小菜兩全、所來挂單、不拘僧道、至即安單、再者安單何寮即何寮常住、不拘年月、願住

則住、欲去即去、去而再返、返而再去亦復如是、大眾常居數百、頻年豐歉無更、所以然者、皆賴諸菩薩靈感之若是、至稱為海單者、視此若何。）（1-23）

鼎湖山慶雲寺は、僧道を問わず修行者を受け入れた。彼らのための食事は常に備わり、数百人が常にその地で修行を続けていたという。おそらく如海顯承もこの地で一定期間修行をしたのであろう。ここまで条件の整った場所は珍しかったからこそ、このように詳細に寺内の状況を描写しているのかもしれないが、挂單の語が見られる地は、禅林の制度が整い、いつでも遊行の僧侶たちを受け入れられるようになっていたことであろう。

五臺山のように巡礼の多い聖地では、一時的に滞在するだけの僧侶に対しても援助を惜しまなかった。

白雲寺（如衣單多、於此寄下、朝臺便益、迴轉到此、再取無妨）（1-8）とあるように、白雲寺では僧侶の荷物を預かり、彼らの五臺山巡礼の便宜をはかった。『参学知津』でも、船に乗って荷物の負担を軽くすることが選択肢として示される²⁷から、身一つで移動しているようにイメージされがちな遊行僧の荷物は意外に多かったのではなかろうか。

このように、挂單できる場所というのは、僧侶に一晚の宿を与え、ときに彼らの荷物を預かり、修行の場所を提供した。つまるところ、『参学知津』に出てくる個別の地名の中で、挂單の文字が現れる場所こそ、当時の修行のネットワークの重要な結節点であると言いうことができよう。

その一方で、挂單する場所がどこにもない「空白地帯」も存在した。たとえば、直隸の正定府周辺はそのような場所であった。

自正定府至方順橋、俱係空單、故不錄出。計路二百二十里。（1-1）

文脈から判断する限り、どうやら「空單」という言葉が意味するのは、「挂單する場所がない」という意味のようだ。そのため正定府から方順橋までの220里もの距離があるにも関わらず地名は一つも書かれない。無料で宿泊を保証する場所はないということである。この距離を一昼夜で移動することなど勿論不可能であるから、おそらくは宿屋を探し、庶民の家の戸を叩いたことであろう。

あるいは「萬安縣（無單）南門東門（住店皆可。）（1-25）」とあるように挂單できずとも、都市の付近は宿が豊富にあったから、懷に余裕さえあれば、このような場所で夜を明かしたに違いない。

修行に適した叢林は、どうしても交通の大道ではなく辺鄙な山沿いに立地することが多い。それゆえ『参学知津』では時折二つの道を併記することがある。片方は挂單できるが険しい道、もう一つは平坦だが挂單することができない道

である。一例を挙げよう。

馬家莊（於此有）新 老二路（雲南至貴州、自馬家莊分新老二路。新路挂單甚少、路稍平坦。老路挂單覺多、山坡似大。）（1-19）

新路は近年になって開かれた商業用の道であろうか。当然ながら歴史ある叢林はそこになく、必然的に巡礼ネットワークからは離れることになる。しかし、新しくできた道が利便性に劣るとも思えない。移動の便を取るか、宿を取るかは個人の状況によって左右されたことであろう^{*28}。

挂單できるところにたどり着けば、自らと同じ境遇の遊行僧に邂逅し、彼らとの交流の中で路程情報も得られたに違いない。

界嶺（此處有二路、至巴河鎮大路無單、小路有單、如走小路、過界嶺二里許、左手轉灣、三十里大春山天然寺、三祖初至此地、以地力薄遷潛山縣北三十里、乃山僻小路兼有坡拗岔路、實有四十里之遙、八里快活嶺、二十里蘭溪鎮、亦有三十里之遙、三十里巴河鎮。以上路途、天氣晴明、色力強健、兼得路熟之人作伴、可行此路。否則以走大路為是。今從大路、五十里）蘄水縣（七十里）巴河鎮萬壽寺。（2-23）

この記述を見ても分かるように、詳細に解説されているのは小路のほうである。如海頭承はおそらくこのような道を自ら通ったからこそここまで詳しく記録を残せたのである。

このように『参学知津』の路程書としての側面に重きを置いてみれば、「挂單」とは宿泊に等しいと言って良い。しかし、この言葉の原義に立ち返れば、挂單とは修行のために一定期間逗留することを指す。『参学知津』でもそのような使われ方をしている部分があるので紹介したい。

齊雲山（此山無挂單處、俱歇丹房、如香客常例）（2-19）

この記載は、挂單が単純な宿泊や休息を意味するわけではないことを示している。齊雲山には挂單する場所はないが、香客（在俗の巡礼客）と同様に丹房で休息すると言っているのであるから、挂單はその寺廟で休息するための絶対条件ではない。道教聖地齊雲山には、巡礼者が絶え間なく訪れたであろうから、彼らを宿泊させるための場所には事欠かなかったであろう。しかし、挂單の場がなかったとは、字義通り考えれば修行の場が存在しなかったということである。齊雲山は僧侶の巡礼ネットワークには組み込まれていなかったとも言え、仮に組み込まれていなかったとしても江南のように交通も発達し叢林が多数存

注 28…なお、ピンゲンハイマー氏は如海頭承が『参学知津』所収の全路程を走破したことを前提に論を進めるが、いくつかの選択肢を提示している場合は、自身の経験に基づいているものは片方だけで、もう片方は伝聞情報ではなかろうか。

在した場所では、旅の障害にはならなかったであろう。僧侶たちはこの地を都會の宿屋と同様の宿泊を提供する場と考えれば良いのであった。なお、『参学知津』には「有武聖宮挂單（2-25）」という記述が有り、道観でも挂單できる場所があったことを示す。

上記のように、経路選択には、挂單の可否に関わる情報は重要なものであった。ところが、本書の後半部分にはしばしば「不住亦可」という言葉が現れる。一例を挙げよう。

誓節渡靈官殿（此單不住亦可。十里）分界山茶亭（五里路傍有）可憩庵（即分界山本支（頗道氣）（2-11）

靈官殿から先へ進むこと15里には可憩庵という修行に適した場所があった。ここから考えると、靈官殿に留まらなくてもよいというのは、ここよりも宿泊・修行に適した場所が近くにあることを意味している。もう一例挙げてみよう。

餘姚縣接待寺（即）藏閣寺（此單不住亦可。如搭行船三十六文即至寧波府。）（2-13）

余姚県は寧波から50キロにも満たない。歩けばそれなりに時間はかかるが、場所は江南である。船に乗れば寧波までの距離など無きに等しい。寧波府には五山の一つに数えられる天童寺・阿育王寺など名だたる名刹が林立する。必然的にこの地を目指して修行僧が集う。このような場所こそ、禅を極めようとする者にとって理想的な環境と言えよう。その手前で挂單するのは時間の無駄というものであった。

このような「不住亦可」という文言は、とりわけ江南の記述に頻繁に現れる。江南は寺院が極めて多く、互いの距離も近い。そのうえ如海顯承にとっては身近な土地であるから各地の情報も豊富に持ち合わせていたことであろう。『参学知津』の江南部分の記述は道案内の側面よりも、こういった修行場所の選定に関わる情報を多く盛り込んでいるように見える。

以上のように、本書に記載される「挂單」の語は僧侶の巡礼を理解するためのキーワードであり、僧侶の巡礼ネットワークを解明するための手がかりを提供してくれる。

ビンゲンハイマー氏は現在仏教関係の地理情報データベースを鋭意作成されており、それは『参学知津』にも及んでいる²⁹。GISを駆使したテーマ図作成は聖地の空間配置を一目瞭然にすることができ、筆者もその恩恵を大いに蒙った。今後は、この情報を「挂單」という言葉を軸に再構成していくことで、参学のために形成された巡礼網を明らかにしてゆく必要があるだろう。

注 29 … <http://mbingenheimer.net/>

4. 孤独な巡礼と「勤問」

『参学知津』のもう一つのキーワードは「勤問」である。「勤問」とは「こまめに人に問うこと」である。「朝山十要」は「雖有是書、更當勤問。蓋處所有興廢之變、道路有通塞之換」³⁰と述べる。『参学知津』は詳細な路程情報を提供するとはいえ、実際の状況はいくらでも変動しうる。とりわけ駅伝などの官設の交通機関を用いることが少なかった参学の旅は不確定要素がつきものであったろう。そのうえ『参学知津』の初版が出版された道光年間と、再刊本が出版された光緒年間のあいだには太平天国の乱があり、具体的な状況は大きな変化があったことが推測される。ならば、僧侶たちは『参学知津』の路程情報を記憶に留めつつ、何度も道を尋ねねばならない。『参学知津』はそのような状況を示唆する記述に満ちている。一例を挙げよう。

注 30…『参学知津』巻首、朝山十要

石虎關。自香嚴寺至此、皆係山岡小路、須留心細問、方不有誤。(2-24)

参学の旅とは往々にして村落や都市といった人の多い場所から離れるものである。人の流れに従って目的地にたどり着くことは望むべくもない。「黄泥嶺、出主麻村、走左手山根路、欲轉灣時走右手小路、更要勤問方可無錯、下嶺即無涯湖。(2-5)」 「石花街。自草店村至此、皆係上山下嶺、須要勤問、方不差錯。(2-25)」 「此中叉路頗多須留心勤問。設或走錯大為不便(1-1)」といった記述からも、深い山に分け入っていく際に極力人を探して道を問う姿を見て取ることができよう。道標もない分かれ道は、文字で説明することも難しい。とにかく問うしかなかったのである。遊行をする僧侶たちは人と交流することでしか目的地に達することはできなかった。

このような状況は、往来が頻繁な都市でも起こりうる。羅浮山からさほど遠くない南港渡という渡し場では「南港渡（每逢一四七日有渡、須問明白要緊）(1-24)」という記述からもわかるように毎月1・4・7のつく日には定期的に渡し船が出るという慣例であった。しかし、必ずしも予定通りに船が出るとは限らない。旅程への影響を防ぐため、速やかに人に確認する必要があったのである。

僧侶たちが道々で人に「勤問」した状況は『参学知津』の何気ない表現の中からも見て取ることができる。

雲居寺（即俗稱）西域寺（雲水洞至此、皆係小路、須要勤問、有人領行更妙）(1-1)

雲居寺の俗称などただの豆知識にすぎないように見える。しかしながら、これは非常に実用的な情報であり、ここにこそ『参学知津』の特徴が現れている。僧侶たちが道を問う際に、呼称が異なっていれば、目的地にたどりつくことなどできるはずもないからだ。

浄業寺（乃）唐道宣律師結茅道場。（土人但知有後庵、鮮知寺名者。）（1-10）

この記載からは、現地の人々が浄業寺という正式名称を知らないことがわかる。つまり道行く人に「浄業寺」はどこかと問うても、誰も案内できないことになる。遊行僧たちが問うべき言葉は「後庵にはどのように行けば良いのか」であった。このような俗称を並記する事例は枚挙にいとまが無い。「楊林站太平寺（本）太平山舍城寺（人惟知太平寺）（1-19）」という記述は、舍城寺が太平寺と呼ばれていたことを示す。他にも「羅舊塘（間）紅岩山水星寺（人惟知紅岩山。鮮識寺名者）（1-20）」「祖塔寺（本）同慶寺（人惟知祖塔寺）（1-20）」のように、典籍史料に記載される地名と人口に膾炙した地名の乖離が示される記述は多い。「湘山壽佛寺（本）報恩光孝寺（人惟知壽佛寺即）無量壽佛道場也（1-22）」「埜塘鋪護國寺（人惟知）十方堂（寺名無有呼者。）（1-22）」「新庵（無管事人間）老庵（即）樓背庵（本）雲際禪林（人惟知樓背庵。（1-25）」「遙塘寺（本）盤龍山報國寺（人惟知遙塘寺）（1-26）」なども同様である。如海顕承がこのような記載を『参学知津』に多数盛り込んだのは、自身が実際に人に道を聞いた際に大いに苦労したからではないだろうか。

このような記述からわかることは、参学の旅は見ず知らずの人々に「勤問」し、頻繁にコミュニケーションをとるものであったということである。参学は禅林で修行するだけでなく、積極的に俗人と交わることが求められた。『参学知津』が伝えるのは、このような旅の過程で交際能力を高めてゆく若い僧侶たちの姿ではなかったか。

5. 小結

本稿では『参学知津』中のキーワードから僧侶の巡礼の様相を明らかにしたが、検討すべき点は多数残されている。地方志や寺志・山志といった地理書との対比は部分的なものにとどまった。また、本書の歴史的記述もさらなる検討に値する。「晒經關（即）唐三藏法師晒經處（1-16）」のような歴史的背景についての注記は至るところに見られるが、全体を見ると『三国志』関係の記述がとりわけ多い。これは当時の『三国志演義』の流行と密接な関わりがあることは疑いない。おそらく『参学知津』の歴史知識の多くはこのような白話小説に由来する³¹。上述のごとく『参学知津』の読者には経験の浅い僧侶が含ま

注 31…『参学知津』には『楊家將演義』に関わる記載があることは Bingenheimer, *op.cit.* p.214. に詳しい。

れた。史書からの引用がある明末の路程書と対照的な姿を見せているのは、このような読者層の違いとも関わってくるだろう。

あるいは、『参学知津』における水路の分析も興味深いテーマである。中国南方の交通手段は船を中心とし、水路は整い、船の種類も豊富であった。僧侶たちは乗り合いの船を用いて各地を移動した。広東では官庁間で文書を往来するための船に便乗することもあった（1-23）。このような中、一部の寺廟は水陸交通の枢軸として機能した。例えば江蘇泰州の関帝廟は乗合船の起点となっており、ここから別の寺廟に直通する船も出ていたという（2-5）。

そのほか、民衆の巡礼に関わる記載も注目に値する。五臺山、峨眉山にはモンゴル・チベットから多数の巡礼が集まった（1-15）。江南に目を向ければ杭州の上天竺寺も巡礼で賑わったという（2-10）。『参学知津』は民衆の巡礼にかかわる情報の宝庫である。これについても稿を改めて論じることにはしたい。

『参学知津』の主要な読者と想定される若い僧侶たちは、本書を参考にしつつ仏教名山を周遊し、高名なる僧侶を訪ね、その合間に名勝古跡を巡った。彼らは俗人と異なり、人の往来が稀な場所に入り、頻繁に人に道を聞く。禅林での修行はもちろんのこと、旅の途上で様々な経験を経ることで修練を積み、交際能力も高めたに違いない。如海顕承自身もおそらくは参学の途上において同様の経験をしたことであろう。『参学知津』とはそういった経験の精髓が詰まったものと見ることができる。本書は少なくとも数百冊が発行され、江南の多くの名利に収蔵された。清末の僧侶たちはおそらく『参学知津』を隅から隅まで読み通し、中国全土を巡礼したであろう。

【附記】

本稿は2017年3月24日・25日にパリで開催された学術会議 Holy sites and pilgrimages. The Daoist living tradition and comparative perspective on East Asian Buddhist, imperial and local practices で行った口頭報告に基づいている。会議の席上で質問・助言をくださった各先生方に感謝申し上げたい。とりわけマルクス・ビンゲンハイマー氏には、『参学知津』の版本状況、公開されているデータベースなど様々な情報を惜しみなく提供していただいた。ここに改めて深甚の謝意を申し述べたい。

上集 由北至西自西至南至中共二十九篇

- 1-1 北京由上方山至五臺山從眞定府回京陸路第一
- 1-2 北京至東嶽泰山路程第二
- 1-3 東嶽泰山之中嶽嵩山少林寺陸路第三
- 1-4 五臺山至北嶽恆山由雁門關回秘魔崖陸路第四
- 1-5 五臺山至潼關陸路第五

- 1-6 中嶽嵩山由南陽府臥龍岡至襄陽府陸路第六
- 1-7 中嶽嵩山由少林寺至熊耳山潼關陸路第七
- 1-8 少林寺由太行山至五臺山陸路第八
- 1-9 潼關由小秦嶺至武當山路程第九
- 1-10 潼關由西嶽華山終南山夷門鎮至漢中府陸路第十
- 1-11 潼關由陝西省城至夷門鎮陸路第十一
- 1-12 陝西省城自崆峒山至甘肅省城由漢中府朝武當山路程第十二
- 1-13 漢中府由沔縣至四川新都縣寶光寺陸路第十三
- 1-14 寶光寺由羅漢寺三昧水至昭覺寺陸路第十四
- 1-15 昭覺寺由四川省城朝峩眉山回至峩眉縣陸路第十五
- 1-16 四川峩眉縣由七擒孟獲等處過火燄山至雲南雞足山陸路第十六
- 1-17 雲南賓川州至大理府羅剎閣陸路第十七
- 1-18 大理府由祿豐縣獅子山至雲南省城陸路第十八
- 1-19 雲南省至貴州省城黔靈山陸路第十九
- 1-20 貴州省由大瀉山嶽麓山至湖南省城陸路第二十
- 1-21 湖南省由岳陽樓至湖北省城黃鶴樓路程第二十一
- 1-22 湖南省有南嶽衡山湘山至廣西省城陸路第二十二
- 1-23 廣西省由六祖菩薩故里鼎湖山至廣東省城水路第二十三
- 1-24 廣東省城由羅浮山至曹溪寶林山丹霞山梅嶺路程第二十四
- 1-25 廣東省由潮州府至福建省城陸路第二十五
- 1-26 廣東從梅嶺由青原山至江西省城路程第二十六
- 1-27 江西省城由吳城鎮至廬山歸宗寺陸路第二十七
- 1-28 廬山歸宗寺由東路至九江府陸路第二十八
- 1-29 廬山歸宗寺由西路從九峯山至九江府陸路第二十九

下集 自東至北由東至南至中共二十七篇

- 2-1 江蘇揚州府至北京陸路第一
- 2-2 江蘇揚州府至北京水路第二
- 2-3 江蘇揚州府由山外至北京車驛站道第三
- 2-4 又山內車驛站道第四
- 2-5 江蘇揚州府至雲臺山回海岸鎮路程
附南通州狼山路程第五
- 2-6 江蘇揚州府由蘇州福山鎮至狼山路程第六
- 2-7 江蘇揚州府由大茅山至南京陸路第七
- 2-8 江蘇揚州府由牛首祖堂至安徽九華山陸路第八
- 2-9 江蘇揚州府至九華山水路第九
- 2-10 江南江蘇省至浙江省城水陸路程第十

- 2-11 江蘇省由浙江湖州府至九華山路程第十一
- 2-12 江南蘇州府由靈岩山龍池磬山東壩至九華山路程第十二
- 2-13 浙江杭州府至南海天台山路程第十三
- 2-14 浙江杭州府由禹陵蘭亭至雁蕩括蒼山路程第十四
- 2-15 浙江省由龍遊縣至福建省城路城第十五
- 2-16 浙江杭州府由嚴州水路至九華山路程第十六
- 2-17 浙江杭州府由東西天目山至九華山陸路第十七
- 2-18 福建福州府由泉州洛陽橋至漳州府路程第十八
- 2-19 安徽池州府九華山由黃山齊雲山下浙江杭州府路程第十九
- 2-20 九華山由浮山至安徽省城程第二十
- 2-21 安徽安慶府由三二祖山至投子山回省城陸路第二十一
- 2-22 安徽省由小孤山至江西九江府水路第二十二
- 2-23 江西九江府由五四祖山至湖北省城路程第二十三
- 2-24 湖北武昌府由漢口鎮木蘭山至武當山陸路第二十四
- 2-25 湖北漢口鎮由水路至武當山從長坂坡回省城路程第二十五
- 2-26 湖北省至四川峨眉山路程第二十六
- 2-27 四川嘉定府峨眉山回湖北漢陽府路程第二十七